



砂泥噴出による道路の陥没(神崎町)



ゴルフ場の鉄柱倒壊(市原市)



強風により倒壊した電柱(館山市)



夜を徹して復旧作業を行う東京電力



浸水による被害(印西市)



地震による道路の崩壊(香取市)



復旧作業を行う自衛隊と東京電力

図書館だより

災害と防災と私たち

令和六年九月吉日・第一〇一号
成田高等学校図書委員会発行

『災害と防災』について

地歴科教諭 稲垣雄一郎

「災害」「防災」という言葉は、おそらく多くの皆さんが耳にしたことがある言葉だと思います。この言葉をより深く、より丁寧に、より自分事として読み込んでいくことで、これから起こりうる自然災害を身近に感じ、ともに生活していけると思います。今回はこの「災害」「防災」というテーマの入試問題を通じて考えてみたいと思います。

二〇一一年三月、東日本、主に東北地方を大きな地震が襲いました。私自身も初めての経験でした。当時私は大学生で、渋谷キャンパスにて授業を受けていました。自宅まで徒歩で三時間かけて帰宅したことを今でも鮮明に覚えています(公共交通機関は全て運転見合わせをしていました)。

さてこの翌年、どの大学よりもいち早くこの「地震」を題材に入試問題を出題した大学があります。一橋大学です。早速ですがその入試問題のテーマを見てみましょう。

設問① A市及びB市の標高を等高線から読み取る。設問② 鉄道と道路の復旧状況についてそれぞれ記述する。設問③ 交通インフラの復旧状況において、被災者の生活にどのような影響が及んだと考えられるかを問う。紐解いていきたい問題は②と③です。私が考

える解答とともに考えていきましょう。② 鉄道は線路や枕木が破損しており復旧が進んでいないのに対し、道路は瓦礫が撤去され復旧が進んでいる。③ 車を持たない人や失った人は移動する手段が奪われ、車を利用できる人との間で日常生活において格差が生まれた。

設問②と③の出題意図(大学側が高校生にこのような問題を出した狙い)はなんでしょうか。私は「地震の性質を正確に読み取り、それが私たちの生活にどのような影響を及ぼし、そこから生じる困難を人間の持つ力である力で乗り越えていける術を考察できているか」と考えました。

鉄道や道路はわたしたちが生活をしていく上で必要不可欠な基盤です。そのような基盤は災害によって損壊してしまいました。しかし我々はその困難をいかに乗り越えて、復興させていくのかまた復興させる術を考えているのか。ここに着眼できているかが重要であると感じます。災害時には「自助」「共助」「公助」の考え方が重要であると言われています。災害を完全に防ぐことは不可能です。しかしながら災害が起きてしまったときに、共に助け合っていく姿勢や行動を考え、実行していくことで災害を減らしていくことは可能であると考えます。自然災害を身近に感じて、ともに生活をしていく工夫を皆さんも考えていって欲しいと思います。

『大本山成田山新勝寺』を訪ねて

二B 大谷涼

成田山新勝寺には数多くの文化財があります。私たちは成田山新勝寺がどのように火災対策をして、文化財を守っているのかを調べるために取材を行いました。



(写真上下・成田山消防活動の様子 成田山新勝寺提供)

まず、見学に行く前に消防隊員の方からお話を伺いました。成田山新勝寺には二つの消防団が存在しています。一つは、成田市消防団第一分団第九部という市に所属している部隊です。しかし、市の職員である為、制限も多くいざという時に自由に活動ができません。そこで作られた二つ目の消防団が、お寺の職員で編成される自衛消防隊です。二十代から五十代の四十人前後で活動されています。自衛消防隊は寺内にある組織なので、成田山や周辺の住宅等で火災が

あつた場合にも初期消火が可能となつていきます。さらに、成田山には消火活動をすぐに行えるよう敷地内には三百本以上の消火器が設置されています。

次に、実際の消防設備を見学に行きました。成田山新勝寺駐車場の側を通っている道路の反対側にシャッターがついた消防車庫があります。中には成田市消防団の消防車と自衛消防隊の消防車の二台がありました。消防車には消火活動を容易にする為に、物を破壊するためのハンマーや大人四人が持たなければいけないほど重いポンプ、消防車自体にも消火用の水が入っています。このような設備が成田山の近くにあることで、火災があつた場合にすぐに出動して現場に少しでも早く駆けつけることができます。



(消防隊員の方と一緒に消防車庫設備を見学)



また、境内の地下には火災が起きた時に大量の水を確保できる、水を貯める為の設備があります。また、水を貯める為の昔か

らある設備があり、名前を天水桶と言います。名前の通りに天から降った水、雨を溜めておく物です。これは建物の柱の両脇に設置されています。現代でいえば、防火水槽と同じ役割をしています。



(上・天水桶 下・境内の貯水設備)



今回の取材では、消防隊が設置された理由や現代と昔の消火設備がどのようなものかについてわかりました。成田山の消火設備について取材をしましたが、他の寺社仏閣との違いを調べてみたいと思いました。

『千葉県西部防災センター』を訪ねて感じた情報の大切さ

三G 加瀬文乃



(上・火災消火体験の様子 下・風水害体験の様子)



北米プレート、ユーラシアプレート、細い太平洋プレート、フィリピン海プレート。日本はこの四枚のプレートの上に南北三〇〇〇kmもの長さの列島が横たわる国だ。これらのプレートによる地殻変動や縦に長い国土ゆえの多様な気候は豊かな自然環境や様々な恵みを私たちにもたらすが、しかしそれらは時折牙をむき自然災害として私たちの生活に甚大な被害を及ぼす。この日本列島で生活をしていて、自然災害に全く合わないまま一生を負える人などそういないだろう。実際に先人たちは災害の度に山の命を失ってきた。しかしその度に教訓を得て、何世代もかけて災害への対策を積み上げてきた。その結果は普段の私たちの生活の周りに溢れる防災情報となつて結実している。



(3日分の食糧の分量・千葉県西部防災センター展示)

現代で防災情報というものは誰もが手に取れる場所にあるが、あまりにも身近にあるために何度も同じような内容を聞かされる。その価値をないがしろにしてしまうことも多々ありうるだろう。しかし、それらは多くの人が犠牲になりながらも積み上げられてきた大切な情報であることを忘れないでおこう。

『“今”からできる！日常防災』

監修 永田宏和

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟
発行 株池田書店

三A 寺尾浩亮

この本は主に地震、火山の噴火、津波、火災、土砂災害、台風、豪雨の七つの災害を想定した防災について紹介しています。二〇二四年元旦には石川県能登半島を震源とし、震度七を記録する大きな地震が起き、被災地では地震による断水が起き、水不足が問題となりました。そのような状況の時にどう対処し、対策すればよいのかを紹介しています。

第一章の“創造する”ではもし災害が起きたらどのような被害が出るのか、どのようなことが起きるのか、想定されるのがイラストとともに載っています。災害による被害もそうですが、起きた災害による断水などの二次被害についても紹介されています。

第二章の“備える”では第一章で想定された被害に対しての日常からできる防災について紹介されています。避難時に持つて行った方がよいものがリストアップされているので避難時の備えがよくわかると思います。

第三章の“知る”では、もしも災害が起きてしまった時に知っておいた方がいいことが紹介されています。住んでいる地域の地形や、公衆電話の位置など改めて気づけることが多いと思います。

第四章の“知識を深める”では、なぜ日本に地震が多いのか、大風や大雨、津波などの災害から身を守るための備えや対策について書かれており、防災について知識を深める内容になっています。災害警報の解説なども掲載されているので、災害時がよく理解できると思います。

『図解でわかる』

『十四歳からの自然災害と防災』

著者 一般社団法人社会応援ネットワーク
発行 株太田出版

三A 平田大悟

日本は日常的に地震や津波、台風や豪雨などが起こりやすい災害大国です。二〇二四年元旦にも石川県能登半島を震源とした震度七を記録する地震がありました。さらに最大四・五メートルの津波まで発生し、一週間で一六八人も人々の死亡が確認される、とても大きな震災となつてしまいました。そんな自然災害と隣り合わせで暮らす私た

ちに、地震のみならずその他の自然災害やそれに対する防災に対して疑問に思うことがいくつか思い浮かぶのではないかと思います。

この本は、災害や防災について、中高生を中心にアンケートを行い、その中でリクエストの多かった質問が取り上げ、四つのパートに分けて編集がされています。アンケートの中には、質問だけでなく、つぶやきのような言葉もありました。回答は「一問一答の「正解」としてではなく、その時、その場での「成解」としてわかりやすく解説がされています。見開きで一つの質問に対しての答えがあるので関心のあるところだけ読むことも可能です。さらに図やイラストによって飽きずに最後までスラスラとわかりやすく読むことができます。

これからも起こり続けられる自然災害や防災について、親しい人たちと一緒に対策を話し合うきっかけになる一冊だと思います。

『活断層地震は』

『どこまで予測できるか』

著者 遠田晋次 発行 株講談社

三B 本村悠華

今日日本で身近な災害は何だろうか。台風、火山噴火、火事、地震。その中でも私は地



震だと思ふ。今年一月に起きた能登半島地震、昨年起きた千葉県南部地震、二〇一六年に起きた熊本地震など、この本は地震について書かれており、なかでも活断層地震について掘り下げられている。活断層地震とはいわゆる直下型地震である。この本では断層の仕組み、活断層はどこまで解明されたのかなど活断層地震について細かく書かれている。

まず内部地震の仕組みは断層を挟んでそれぞれ異なる力の向きが加わると断層周辺の地殻が徐々に歪み、その歪みが強度に打ち勝つと岩盤が一気にずれ動き地震が起きる。中学、高校で地震の起き方について習ったがあらためて読むとすごいことだと思ふ。地震にはP波S波があり、その振幅はおよその距離の二乗に反比例して弱まっていく。それは音楽と同じで地震波も様々な周期の波が重なり合っている。楽器でたとえるならマグニチュード六〜七の中規模の地震ならサクソフォンなどの中音楽器、それ以上の大規模地震ならコントラバス、チューバなどの低音楽器が挙げられる。次に活断層とは用いられる専門分野や用途によって異なってしまうが「最近の地質時代に繰り返し活動し、将来も活動が推測される断層」を活断層という。活断層の研究はまだ半世紀ほどしか

たつていない。私はこのことを知り他の災害の研究に比べて全然進んでいなく内容もそこそこだろうと思った。しかし、一九七〇年代には当時までのデータセットを使って関係性が求められるという。

私は海岸沿いに住んでいるのでどちらかと言えば海溝型地震の方が多く発生しやすい。内部地震と海溝型地震は起こり方も被害の規模も違うのでこの本を通して地震の周期断層の現れ方、活断層について沢山学ぶことができた。この本はグラフや図、過去の地震のデータなどがたくさん載っていてわかりやすい内容となっている。また熊本地震は活断層地震なのでそれについても詳しく書かれている。皆さんもぜひこの機に手に取って地震について学び、これからの地震に意識を向けてほしい。

『AI×防災』

『データが紡ぐ未来の安心・安全』

著者 古田均・北原武嗣・野村泰稔・他五名
発行 株電気書院

三B 湯ノ口颯杜



世界各地において頻発する自然災害に対する防災・減災は、現在もなお重要な社会

課題だ。この本に書かれている深層学習とは何か詳しく見ていく。

深層学習とは、機械学習の一つで、「画像認識」「音声認識」「自然言語処理」等の様々な分野で大きな成果を上げており、学習を行うニューロネットワークに、深く層に積み重なっていることから呼ばれている。地震被害に関する情報は、一般に公的機関による現地確認などの人的な手段によって収集されているが、より高速に情報収集する手段として航空機などによるセンサーから取得されるデータを活用し研究が進んでいる。特に、高精密な画像を取得するための光学センサーや天候や昼夜を問わず地表を撮影する合成開口レーダーなどで災害後に広域の状況を知ることができる。これらの手法を用いて、深層学習を利用した衛星撮影画像からの地震被害検知システムや、災害関連の深い情報を統合するなど自然災害一般見地に対して有効な方策となることが期待されている。



『塩の街』

△著者△有川浩

△発行△(株)KADOKAWA/角川文庫

三C 岩永華紗音



他の生き物の死を目に見えて悼む動物は、人間くらいだと聞いたことがある。埋葬や葬式が主な例だ。つまり人間は「死」を認識して、確かに恐怖しているということになる。だから、人間は自分が生きるか死ぬかの窮地に立たされた時に、どんな手段を使っても生き延びようとすると思っていた。この本を読むまでは。

「塩害」という前代未聞の災害に対して立ち向かう男と少女の物語。この本のあらすじを読んで想像した物語は、このようなものだった。けれど、読めば読むほど私の想像は二転三転することになる。崩壊寸前の世界で一日一日を懸命に生き延びていた男と少女、秋庭と真奈は様々な人と出会う。海を求めて歩き続けた旅人、刑務所から脱走した囚人、そして胡散臭い自衛隊。世界崩壊を目の当たりにしたことがトリガーなのか、彼らは皆何かが壊れてしまっているようだった。そんな彼らを見てきた秋庭と真奈の、世界と二人を賭けた一世一代の選択を見

届けるというのがこの作品になっている。私がこの本で心惹かれたのは、死と隣り合わせの描写がとても繊細であったことだ。明日生きていられるかわからない。それにも関わらず人間は弱くて、他人にすがらずにはいけない。だからこそ、自分を犠牲にしても他人を助けようと心が動く。窮地で怖いのは、自分が死ぬことだけではない。すぎる相手がいなくなってしまうことも、十分に怖いのだ。それは、私が考えたこともない側面からの考え方だった。

人間の弱さを暴いていく話ならいくつか読んだことがある。しかし、登場人物だけでなく情景描写までもが、人間の弱さを隠そうと強がる姿を表現しているところには心が驚かされた。「塩害」という窮地が結び付けた不吉とも言える縁を美化する様子は、まるでその場に居合わせたように鳥肌が立った。そんなものを盾にするのに、人間は存在意欲に囚われずに他人のために強くなれる。これこそが、作者がこの本を通じて伝えたいメッセージだと私は思う。「塩害」を背景に得られた出会いを胸に、強くなれた二人の結末を是非その目で確かめていただきたい。



『災禍の神話学』

△著者△沖田瑞穂 △発行△(株)河出書房新社

三C 香川心美



近年、地震や新型コロナウイルスの流行、ウクライナでの戦争など多くの災害、人災が起

こつています。この本では、ウクライナ侵攻、震災、新型コロナウイルスといった現代の災害にも触れながら、神話と災害にまつわる不思議な世界に迫ります。著者は神話学の専門家で、様々な文化や時代の神話を通じて人類が災厄にどう向き合ってきたのかを探索しています。一章では、神々が人々にとつてどのような役割を果たしてきたのかに焦点を当てています。神話が社会や文化の中でいかに形成され、伝承されてきたのか、その背景にある深い影響に迫ります。二章では、神話における災厄や災害に焦点を当てています。神話の中でどのように災禍が描かれ、人々がそれにどのように対処してきたのかについて深く掘り下げられています。様々な文化や時代を通して、災厄の神話がどのように形成され、伝承されてきたのか、その背後に潜む意味に迫ります。三章では、神話の中で描かれる異次元や神秘的な存在

に焦点を当てています。異界神聖な領域がどのように神話に表現され、人々の信仰や想像力にどのような影響を与えてきたかが詳細に探求されています。四章では、神話に登場する英雄や伝説的な人物に焦点を当てています。様々な文化や時代で語り継がれてきた英雄たちの冒険や試練、そして彼らの人々に与えた影響が紐解かれていきます。神話学の視点から、英雄の物語がどのように社会や文化に影響を与え、人々の共感や信仰を引き起こしてきたかについて教えてください。五章では、神話が時間とともにどのように変容し、異なる文化や時代でのように再解釈されてきたかに焦点を当てています。神話の進化や変遷、異なる解釈がどのように神話の豊かさを生み出してきたのかについて教えてください。また、神話が人間の精神や文化に果たす役割の多様性が明らかにされています。

この本は災害、人災についての色々な時代、地域の神話を現代のことにも触れながら知ることができる一冊です。



『小説 すずめの戸締まり』

〈著者〉新海誠

〈発行〉(株)KADOKAWA/角川文庫

三C 高橋周



の、監督自らがつづる原作小説です。

私が紹介するのは二〇二二年に劇場公開された映画でもある「すずめの戸締まり」

主人公である岩戸鈴芽はいつも繰り返し見る夢があった。満天の星空と太陽、荒れ果てた家などが存在する不思議な場所を幼い鈴芽が一人歩いているという夢を。そんな九州のとある静かな港町に住む一七歳の少女・鈴芽がある日の登校中「扉を探しているんだ」と言う美しい青年と出会ったことから物語は動き始めて……。そんなあらずじから始まるこの作品は、美しく透明感のある映像と儂くも脆い中にも強さを感じさせる音楽など、公開当時は一時ブームになっていたこともあり記憶に新しい人も多いのではないのでしょうか？

この「すずめの戸締まり」という作品は、映画を見た方ならわかる通りに東日本大震災を題材とした作品となっています。幼少期に震災の被害に遭っていた鈴芽、幼いうちに家族や住んでいた町を失った鈴芽の抱え

る心の傷の描き方と物語を通して「鈴芽がトラウマに向き合い成長していく」姿が本作の魅力です。また映像としてだけではなく文章で読むことで、映像だけでは味わえなかった小説ならではの登場人物の細やかな心理描写や、映画だけでは今一つ分からなかった場面ごとの詳細な説明などが見られることも映画にはない小説版を読むことの特徴ではないかと思えます。作品内ではかなり直接的に地震を描いているため賛否は少なからずあったのですが、直接的に描いているからこそ、地震や東日本大震災への新海誠さんの強い想いが感じられました。

鈴芽は旅先で様々な人たちに出会い、助けられ、成長していきます。当てのない旅でもあきらめずに様々な人に助けられながら懸命に先に進んでいくその姿はこれから先受験やその他色々な壁にぶつかるであろう私たちにも重なるところがあるのでではないのでしょうか。

『ことわざに学ぶ』

『気象災害から命を守る知恵』

〈著者〉弓木春奈 〈発行〉(株)河出書房新社

三D 東尚樹

皆さんは災害対策をどこから学びましたか？テレビ、学校、親、いろいろな方法で知



る機会があったと思います。この本では、昔から伝わることわざから、年々増加し悪化していく気象災害に対して身を守る方法を気象予報士ならではの視点からわかりやすく、科学的に教えてくれるのか、からどのように対応したら良いのかまで事細かに記されています。そのため、その都度しっかりと対処することができます。例として挙げると、「三章危機から逃れる知恵、身を守る術」という章の『いざ』というときに判断を誤らない」という項目の一つに、「避雷のため、身を低くせよ」というものが紹介されています。ここでは、どのようにしたら落雷から身を守るか、ということを通して過去に起こった事例と比較し、その時どうしたら命を守れるのか、が図を用いてわかりやすく紹介されています。

このように、普段の生活から活用できるものから津波のような普段あまり起こりえない現象ではあるが非常に大切なこと、また季節ごとの気象災害の被害も紹介されており、夏なら熱中症による体調不良の対策、冬なら豪雪がどのように起こってしまうのか、そしてどのような被害が出てしまうのか、というものがあります。他にも気象キヤスターの日常というちよっとした小話のよ

うなコーナーも記されていて、普段私たちが見ることのできない部分垣間見ることができます。また、この本を著している弓木春奈さんは気象に関してのプロであるため、同じデータでも私たちとは違う見解を得ることも多々ある事と思います。そこでの差を比べて、どうしてそうなったのかを考えてみるのも面白いかと思います。

最後に、自分が気象災害にあったとき、紹介されていたものを活用して身を守る事ができるのとは別に、読む前と読んだ後は方法を知っていてもなぜその方法が良いとされているのかをより深く知ることができません。そのため、素早く行動に移すことができます。でしよう。

『傾物語』

著者 西尾維新 発行 (株) 講談社

三E 五十嵐翼



「人間らしさ」とはいつたいなんなのだろうか。何かを慈しむことがそうだと唱える人もいれば、他人を虐げてこそそうだとという考えの人もいるように、この事柄には人によって様々な解釈があるだろう。本文では物語内のゾンビパニックという災害に触れながら、

「人間らしさ」について考えていきたい。

ゾンビパニックとは生きて姿を与えられた死体の行進、それに伴う災害のことである。本作は、パタフライエフェクトなどを絡めたSF風な物語で、過去へと戻った主人公たちの行動によって未来が変わり、街の風景はそのままに大規模なゾンビパニックが起こってしまう、といった内容である。

私の考える「人間らしさ」は災害下での主人公らの考え方によく表れている。元々この災害は過去で行った人助けの招いた結果であり、普通の人ならばその行いを後悔し、自らの手で滅んでしまった世界で自分だけが生き残っているのが嫌になるだろう。それに対し、主人公らは後悔こそすれど、だれかを助けることに間違いなどなく、起こってしまったこの結果は仕方がないものと、自身らのもつ信念を肯定している。自身の行いによって世界が傾いてしまったのだから、この考えを非難する人がいるのは当然のことだろう。だが、主人公らの様に自分の信念を肯定し、人を迷いなく助けることもまた、ひとつの「人間らしさ」と言えるのではないだろうか。ところで、年始に起きた能登半島地震の際は良くも悪くもその「らしさ」が垣間見える瞬間が多々あった。テレビ越しに現地の無事を祈る人もいれば、注意に則って寄付などの自分ができることで復興を支える人もいた。しかし、中には下らない陰謀論を説く

人、求められてもいないのにわざわざ現地に赴く、災害のある種のイベントの様にとらえている不謹慎な人もいた。こんな多種多様な人柄も各々の「人間らしさ」故だろう。だが、前述の物語に対する評価のようにすべてを肯定することはできない。たとえ人を想って起こした行動でも、それが状況下に反しているのなら正しい行いとは言えないだろう。各々の持つ「人間らしさ」と現状をすり合わせ、その場に則った自分にできることをするのが、災害下に求められる姿勢だろう。

『アリエナイ毒性学事典』

著者 くられ 発行 (株)三オプックス

三E 鎌田倅輔



災害は何も異常気象や地殻変動だけによって起こるものではない。人為的なものによつて起こる災害もある。その要素の一つが毒だ。毒による災害。そう聞くと「ミステリーとかのフィクションの話でしょ」と考える人も多くいると思うが、毒というものは実際、身近なものにも隠れているのだ。

例を挙げるとするならば、一酸化炭素が妥当だろう。一酸化炭素は無色・無臭の気体で、酸素が不十分な環境で不完全燃焼す

ると発生する。これを吸うと、血液中の赤血球に含まれているヘモグロビンと結合し、酸素の運搬を阻害する。毒性も凶悪で、空气中に〇・〇〇五%含むだけでも具合を悪くさせ、〇・一%以上含まれていると即死させる力を持つ。主に自殺に使われる毒で、練炭自殺での印象も強いだろう。もしかしたら、災害というよりそういうイメージの方が大きいかもしれない。しかし災害の方も十分に起こりうる。過去には、冬場に十分な換気をせず、室内でコンロやストーブなどのガス機器を使用し一酸化炭素中毒になる事例や、大雪で立ち往生したことで、エンジンのつけっぱなしが原因で中毒になる事例がある。

もう一つの例として、硫化水素が挙げられる。硫化水素は一酸化炭素のようにそこまでメジャーな毒ではないが、「草津や箱根などの温泉地で嗅ぐ腐った卵のような匂い」と言えばわかる人も多いだろう。別に温泉ではなくともゆで卵や下水からも検出されるように、とても身近な毒といえるかもしれない。その匂いが特徴的な気体ではあるが、ある一定の濃度を超えると我々の体は匂いを感じなくなってしまう。それ以上の濃度になると意識低下を引き起こし、空气中に〇・一%以上含まれると速やかに死に至らせる。これだけであつたら前に挙げた一酸化炭素と同じように感じられるだろうが、硫化水

素にはもう一つの危険性がある。空気中における濃度が高くなりすぎた場合、引火性ガスとしての性質があらわれるのだ。こうなると、タバコの火や静電気でも爆発する一触即発の状況になってしまう。毒性以外の危険性を持つことでより大きな災害を発生させる可能性を秘めた毒だといえよう。

このような毒は挙げた以外にも多くある。それらについて書かれた本は色々あるが、最もわかりやすく読めるというならこの『アリエナイ毒性学事典』だろう。この本では明確な毒だけでなく、食品添加物やサプリメントなど怪しい薬品の毒性についても紹介している。自然災害だけに気を配るのではなく、身近で起きている毒による災害にも目をむけるのはどうだろうか。

『東日本大震災』

報道写真全記録 二〇一・一・三・一 一〜四・一一

著者 朝日新聞社、朝日新聞出版

発行 朝日新聞出版

三F 寺嶋權



二〇一一年三月一日午後二時四六分、マグニチュード九・〇の巨大地震が発生し、東北、関東地方は壊

滅的な被害を受けた。東北地方太平洋沖地震、「東日本大震災」である。それは単なる揺れだけではなく、その直後には高さ最大四〇mを超す大津波が沿岸部を襲った。この津波は家や車、そしてそこに住む者の暮らしまでも一瞬にして奪い去っていった。さらにその津波によって福島第一原子力発電所が大爆発を起こし、大量に放出された放射線が土地を汚染し、現在も「帰還困難区域」として立ち入りを禁じられている場所は十年以上たつた今でもある。

皆さんはこのときのことをどれくらい覚えていたのだろうか。当時私たちは三歳か四歳、なんとなく覚えている人はいるだろうがはつきりと鮮明に覚えている人は少ないだろう。本書は朝日新聞のカメラマンが震災の起こったその日から一か月後の四月一日までの写真を出来事と共にまとめたものである。

例えば、津波が民家を瓦礫の山とし、奥から迫る火の手がそれらを跡形もなく燃やして行く写真、瓦礫の中で泣き崩れる女性の写真、新学期の準備として津波で流された泥だらけのランドセルから教科書を取り出す小学生の写真など、残酷で悲しい写真ばかりだ。しかし、これらの写真はメディアでもあまり取り上げられないものばかり。震災をあまり覚えていない私たちだからこそ、目をそらさずに見ておくべきだと思う。

後半部分には原発事故のことについて詳しく書かれている。皆さんはこのことについて「福島原発が爆発して放射線が・・・」ということくらいは知っているかもしれない。しかし、原発がどのような仕組みで、なぜ事故が起こってしまったのかを知っている人はほとんどいないだろう。本書では、原発の仕組みや何が原因で事故が起きてしまったのか、またその時指令室ではどのような対応がとられていたのかについても詳しく知ることができる。最後に私は、自分たちは震災のことを後世に語り継いでいかなければならない世代だと思っている。しかし当時、私たちはまだ幼く、震災についてほとんど記憶がなくあまりにも無知である。なので、改めて震災の悲惨さを知り、防災意識を高め、のちの世代に語り継いでいくためにもこの本をぜひ一度手に取って読んでみてほしい。

『災禍の神話学』

地震、戦争、疫病が物語になるとき

著者 沖田瑞穂 発行(株)河出書房新社

二下 渡邊 怡美



この本は怪談を含む災害に関する神話を取り扱ったものです。去年発行された

ものであるため、最近の災害についても書かれています。内容は五章に分かれていて、第一章が自然災害、第二章から第四章が戦争、第五章が疫病となっています。

この本の中で筆者は災害と神話の共通点は「恐れ」であると語っています。この本は災害を経験した人々が自分の痛みを託した神話を、実際に起こった災害や筆者の経験も交えて紹介しています。私が見どころだと思うところは二つあります。

一つ目は第一章の地震のところですが、なぜなら、今年のお正月、元旦に石川県能登地方で最大深度七の地震が起きたからです。私たちがいるのは千葉県であるにもかかわらずこちらでも揺れが伝わってきました。その時私は家の二階にいて、またどうせいつもの小さい地震だろうと思いつつテレビを見にリビングに降りたら、ニュースで津波が来るから逃げろと言っていて、とても驚いたことを覚えています。ニュースで強い口調で逃げろというのは東日本大震災の教訓からだと思いたくありません。それなのに被災地においても、やれ大袈裟だのやれ避難しなくていいだの言うふざけた輩がいます。日本は地震大国で皆地震に慣れているため、地震の恐怖を忘れていのではないかと私は考えます。そういった意味でも地震への恐怖を託した神話は見どころだと考えました。

二つ目は第五章の疫病のところですが、今は

もう五類に移行していますが、新型コロナウイルスは長期間猛威を振りました。疫病の神話は少ない一方で、ここでは治癒や医神の神話が紹介されています。収束して五類に移行したコロナは治癒したと言えるためここも見どころだと考えます。

筆者はこの本の終わりで、神話は思考をすることで痛みを癒して己を戒めるための装置であると書いています。私が紹介した二つはどちらも災害への警戒を強めたり、人々の心よりどころとなるようなものです。現代でいうと自身が起きた時のニュースキャスターと同じような役割をしていると思います。この二つは実際に災害が起きた時に重要となるものだから、この本をもとに時々思い出してほしいと思います。

『東日本大震災』

消防隊員死闘の記

〈編者〉南三陸消防署・亘理消防署

神戸市消防局・川井龍介

〈発行〉(株)旬報社

三G 加瀬文乃



この本は東日本大震災で被災地となつた宮城県にある南三陸消防署と亘理

消防署、応援に駆け付けた兵庫県の神戸北消防局の隊員たちが記した手記をもとに編集したものである。

二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災は未曾有の大災害として未だ多くの人に鮮烈な記憶を残している名ではないだろうか。特に東北地方の太平洋沿岸部を襲った、私たちが過去経験したことのないほどの大きな津波が、建造物や人々を飲み込み、甚大な被害をもたらしたことは多くの人に恐怖を与え、忘れることのできないものになった。

この大地震では地元消防局はもとより、最大時一〇万人規模の隊員が派遣された自衛隊をはじめ、警察、消防、海上保安庁等からも多数の隊員や医療スタッフが全国から派遣され、被災地での捜索活動や救援・復旧支援活動にあたった。その多くの現場では、きわめて困難な救助活動があった。広範囲に及ぶ活動区域、一面に散乱する瓦礫や泥水が立ちほだかる中で、活動や余震が続く津波警報が継続している中での活動、緊急援助隊や自衛隊、警察などの多くの関係機関との連携、救助活動の長期化などに関した様々な課題が生じた。悲惨な被害を目の当たりにして、どうしようもない無力感に襲われたものも多かった事だろう。しかし、それと同時に我々は、これから必ずやつてくるであろう大災害への対応のみならず

各種非常事態への対応能力の強化に資する教訓を得た。

今年の初め能登半島地震が発生した。日を追って事態が深刻化する中、過去の震災の教訓を生かし多くの支援が行われている。国が行う避難所への物資供給を混乱する現地の要請を待たず、政府が必要と判断したものを送るプッシュ型支援がいい例だろう。これは二〇一六年の熊本地震から導入されたものだ。このように過去の経験を踏まえ次に備えること、得た教訓を次の災害発生時に忘れられないように、防災教育等を通じて後世へしっかりと引き継いでいく事は我々の使命ともいえるだろう。

『のこされた動物たち』

福島第一原発二十キロ圏内の記録

〈著者〉太田康介 〈発行〉(株)飛鳥新社

三G 村本武範



近年、同行避難という考え方が広がってきています。同行避難とは、災害発生時に飼い主がペットと一緒に安全な場所まで避難する行為のことを指します。

ペット葬儀事業等を手掛ける企業が行つ

た「ペットへの意識調査」では、七二・五%もの回答者が「ペットは家族(ヒト)と同等である」と考えるほど、現在では「大切な家族の一員」という強い意識があります。以前は共同生活を行う避難所で、動物と暮らすことが苦手な避難者やアレルギーを持っている避難者がいる可能性があるため、避難所に連れて行くことも断られるケースが相次いでいました。そのため政府は、地域防災計画に「ペットとの同行避難」について記載し、ペット救済マニュアルの作成や、餌・ゲージなどの物資の備蓄などを行っていました。しかし、多くの地方自治体の災害担当部署では「ペットとの同行避難」に関する意識が十分に浸透していなかったこと、避難所での具体的な運用取り決めていなかったことなど、その受け入れ体制は不十分なものでした。

その後、未曾有の大災害。東日本大震災が発生します。二〇一一年三月十一日、東北地方を中心とする最大震度七、マグニチュード九・〇の地震が発生し、北海道・東北・関東の太平洋沿岸に最大遡上高四〇・一メートルにも上る津波が押し寄せました。東京電力福島第一原子力発電所では、世界最悪レベルの事故が発生します。地震発生から約五〇分後の津波によって、全電源が喪失、炉心の冷却機能を失ってしまいます。午後七時五〇分頃、政府が原子力緊急事態の宣言を発表。その後、翌三月十二日午

後三時三十六分に一号機で、三月十四日午前十一時一分に三号機で水素爆発が発生。三月十五日午前六時半頃に四号機で原子炉建屋が損傷したと原子力安全・保安院(現・原子力規制委員会)が発表しました。それに伴い三月十一日午後九時二十三分に原発から半径三キロ圏内の住民に、三月十二日午後六時半頃に半径二十キロ圏内の住民に避難指示が出されました。避難指示が出されていた地域では当時、原発事故の詳細が分からなかったり、住民に避難指示が十分に伝わっていなかったりと、混乱が生じていました。そのため、数日で帰れると思いついて避難バスに乗った住民の方や、すぐに戻った住民の方などもいました。しかしその後、避難区域への立ち入りは制限されています。こうして、避難区域にペットが置き去りにされてしまったのです。

本書では、二〇一一年三月から七月の半径二十キロ圏内のペット(犬・猫など)や家畜(牛・馬・豚など)の様子が著されています。飼い主を待ち続けている犬、人のいない街でひっそりと亡くなっていた猫。牛舎にいる牛についても取り上げられていましたが、写真から現実を直視するには耐え難い惨状が伝わってきました。震災の、これまでもあまり知られてこなかった被災者であるペットや家畜たち。半径二十キロ圏内で動物が置き去り

にされたという「事実」は、決して忘れ去られてはいけないものです。より多くの方にこの「事実」を知って頂くためにも、手に取って読んでほしい一冊です。前述した通り、同行避難の受け入れ体制が不十分であったことも、この悲劇の発生に関連があると考えます。震災後、政府は新たに「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」を作成し、同行避難の推進に力を入れてきました。各地方自治体でも、受け入れ体制の整備や様々な規定の作成が進められてきました。しかしその後も、実際に災害が発生する度に、同行避難対応の避難所運営が難航するなど、課題が浮き彫りになることが多く、依然として、現在でも見直し・改善が行われています。

今年で震災から十三年が経ちます。震災を経験した犬や猫の多くは、寿命から考えれば、既にこの世を去っている可能性が高いと思われる。人間の生活・営みの延長線上で起きたこの出来事を、風化させず後世まで伝えていく事、そしてよりよい避難所の設備・運営を整えていく事が重要であると感じます。



『水害列島日本の挑戦』

ウイズコロナの時代の地球温暖化への処方箋』

著者 気候変動による水害研究会
発行 日経BP

三G 横山慶大

近年、地球温暖化の影響と思しき水害や土砂災害が、毎年のように我が国を襲っている。メディアでたびたび耳にするようになった「観測史上初」「今まで経験したことのない」という言葉。激甚化する災害の中で、「今まで災害にあつたことがないからこの地は安全」という過去の経験はもはや通用しない。

我々が水害と聞いて思い浮かぶのが河川の氾濫や高潮による、住宅への浸水だが実態はそれに留まらない。インフラの倒壊、ライフラインの機能不全、そこから発生する経済への打撃等。その中でも本書で特段目を引いたのは「逃げない問題」だ。堤防の整備等により川と人との関係が希薄になり住民が川への出来事を「他人事」だと思っているという。近年は行政や報道で避難の重要性が伝えられていて、自治体からはハザードマップが配布されている。にもかかわらず犠牲者が多いという点で、少なからず住民側の災害への意識が欠如していると言えるだろう。

う。そこで、災害対策を行政に任せきりにせず我々にもできる「マイ・タイムライン」が紹介されている。マイ・タイムラインとは、豪雨等が予想された際に、河川水位の動向に応じて住民一人一人の家族構成や生活環境に合わせて「いつ」「何を」するのかをあらかじめ時系列順で整理した「自分自身の」防災動計画である(自助)。これを作成することにより洪水のリスクや防災情報を知り、行政が作成するタイムライン(公助)と組み合わせることで一人一人が自分に合った避難方法を認識することができる。加えて災害時には地域との連携(共助)も重要とされるが、地域でこれを作成することによってコミュニケーションを広げる可能性もある。この方法は防災を考えるうえでバランスよく役割を果たすことが欠かせないとされている自助・公助・共助の三点を押さえている。

本書は近年発生した水害、土砂災害から様々なデータを用いて分析し、防災、減災への進路を示している。なぜどのよう災害が起るのか、防災のために行政、住民はどうすればよいのか。災害の「リアル」を知ることです。防災、減災の実現に繋がられるだろう。



『首都崩壊』

著者 高嶋哲夫 発行 株幻冬舎



三H 芳賀創太郎

「首都直下型地震」という言葉をご存じでしょうか? 「首都直下型地震」とは、

首都及びその周辺地域の直下で発生するマグニチュード七クラスの地震及び相模トラフ(相模湾から房総半島南東沖までの海底の溝)沿い等で発生するマグニチュード八クラスの海溝型地震のことを指します。マグニチュード八クラスの地震といえ、一九二三年の関東地震(M七・九)、二〇〇三年の十勝沖地震(M八・〇)が例として挙げられます。そしてそれは今後三〇年間で約七〇%の確率で起るとされているのはニュースなどで度々報じられ、皆さんも認知されていると思います。しかし実際に「首都直下型地震」が起きたとしたら? 皆さんは考えたことがありますか? 「首都直下型地震」は地方で起る地震と比較しても被害が甚大かつ深刻です。確かに地方で起る地震も脅威であることには変わりません。例を挙げるとすれば、今年の元旦に起きた「令和6年能登半島地震」(M七・八)が記憶に新しいと

思います。能登半島を中心に多くの建物が倒壊し、大規模火災も発生しました。石川県では多くの人が亡くなり、新潟、富山、福井、岐阜の各県などで多数のけが人が出ました。しかし、「首都直下型地震」はそれに加えて様々な不具合が発生します。何故なら日本の中枢機関が集中する東京都が全面的に被害を受けると、政治や行政、運送、金融経済に多くの影響が及ぶと考えられるからです。また、地方と比べて死者数、負傷者数が多くなることも明白です。これらを踏まえて私たちは日頃から災害対策を施し、今日災害が起こるかもしれないという危機感を持って生活していく必要があります。この『首都崩壊』という本は実際に「首都直下型地震」が起きた際にどのような被害が出るのか？また起きた際にどのような対処を私たちは行えばいいのか？に対する一つの答えなのではないかと私は考えます。

『デザインノート Premium』

最強のロゴデザイン

〈編者〉デザインノート編集部

〈発行〉(株)誠文堂新光社

三H 渡邊一稀

今年を立て続けに悲惨な出来事が相次いだ。今になっても鮮明に覚えている方も多い



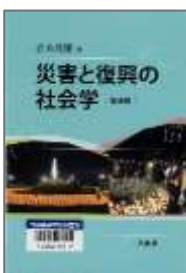
だろう。人間によるミスは多少防ぎようがあるかもしれないが、自然災害を未然に防ぐことはほぼ不可能に近い。そのため自然災害が発生したそのあと、住民の避難や二次災害を防ぐことが重要である。その非難を円滑に進めるためには「どの道を行けば最短で避難所へたどり着けるのか」ということが一目でわかる「目印」が必要になる。もちろん、震災時被災地にいるのは地元の人だけではない。県外からの人もいれば外国人もいるだろう。そのような土地勘がない人たちにも簡潔に伝えることができるものが必要となる。もしすでにあるのであれば、それをさらにコンパクトにわかりやすく。しかし、そう簡単に万人に分かりやすい「目印」を作ることができれば苦労はしない。この本はそんな苦労の一つである「思考のプロセス」を見ることが出来る。詳しい内容を載せることができないためここでは明言を避けるが、たとえば今話題の「非課税で小額から投資可能なサービス」や老若男女問わず人気な「GU」と同じ系列で赤と白のカタカナロゴのあの服や」などの数多くのロゴがどのようなプロセスで生み出されているのかを自分の眼で見て学ぶことができる。ここで学んだロゴ制作のプロセスを「一目でわかる『目印』」作

成に使用することにより、万人に分かりやすいものを作ることが出来るだろう。またここで学んだロゴ制作のプロセスは近年増えてきている外国人観光客向けの「目印」にも使用することが出来るだろう。このようロゴ制作の「思考のプロセス」様々の用途に活用可能であり、ゆくゆくは「ロゴ制作」という範疇を超えて私たちにさらに良い影響をもたらすことが出来るのではないかと私は考える。この本に記載されているような、ロゴ制作時のプロたちの考えが視覚的に表現され、それを体系的に学ぶことができる媒体というのは左程多くはない。「ロゴ制作」言うなれば「デザイン」を学習するにはこれ以上ない教科書だと私は思う。是非目に入った際は手に取ってみてほしい。むしろ自分から手に取りに行つてほしい。おすすめです。

『災害と復興の社会学』

〈著者〉立木茂雄 〈発行〉有朋書房

三I 伊藤直也



この本には東日本大震災の被災状況や後の被災者達の心情や暮らし、復興までの流れなどが載っています。新年早々に起きた能登半島地震の惨

状と共に説明していきたいと思ひます。

まず一月八日時点での安否不明者が三二人、石川県死者が一六八人と決して少なくない死者が出てしまいました。震災が発生してから七二時間の壁があり人命救助におけるタイムリミットの目安をさします。そのため救命活動は震災発生から三日間は人命救助が最優先になるので道路の復旧や避難所への物資輸送はその後になるので最低三日間、余裕をもつて一週間分以上の食料や防災グッズを常日頃から揃えておくことは大切です。能登半島地震後、避難生活が続く中避難者の健康への影響が懸念されています。インフルエンザやコロナなどの感染症が増えたりして看護師や保健師の支援を求める声が相次いでいます。他にも避難所が混雑して個人のスペースが取りづらかったり、トイレや暖房の設備などに苦慮したりするところも多く、被災者からは体力の消耗や精神的ストレスを訴える声が出てきてしまいます。他にも災害時には空き巣や強盗、暴力事件、性犯罪なども起こります。つまり震災後、避難生活が大変な中犯罪にも注意しなくてはなりません。

次に皆さんも災害時や震災一年後などのニュースは見ると思ひます。ですがその間の事はあまり報道されません。まずは皆さんが募金したお金の使い道です。募金したお金は各自自治体に分けられて、他には瓦礫撤

去や炊き出しなど震災直後の救助活動や仮設住宅の設置子どもたちへの学習支援などの生活支援活動、街づくりなどの復興支援活動など様々な使い道があります。災害後、心のケアとして「こころの耳」という被災者のための心と健康の相談ダイヤルなどがあります。長々と説明しましたがこの「災害と復興の社会学」という本には災害の概要から被災後の生活まで様々な災害に関することが載っているのでぜひ手に取り読んでみて下さい。

『編集後記』

新勝寺は歴史も伝統もある、日本でも知らない人がいないほどのお寺です。新勝寺には防災対策として自衛消防隊という独自の組織があります。この消防隊は有事の際は消防署よりも早く対処します。また、成田市消防団第一分団第九部は千葉県消防操法大会で常勝の消防団です。取材を行う中でその方々の思いがしみじみと感じられ、心の底から応援したくなりました。(健)

▼取材・パネル展示協力

- ・大本山成田山新勝寺
- ・千葉県西部防災センター
- ・千葉県庁防災危機管理部

危機管理政策課地域防災支援室

▼災害写真協力

- ・千葉県市原市・千葉県印西市
- ・千葉県香取市・千葉県神崎町
- ・千葉県館山市・(株)東京電力

▼学校図書館の発行者

『Bibliothek』

新着図書の中から、お薦めの図書を紹介。

◆毎週発行(掲示及び学校HP掲載)

『READ』

教職員のおススメの本を紹介。

◆毎月発行(掲示及び学校HP掲載)

『図書館だより』

テーマに沿って図書委員が取材、編集。

◆毎年九月頃発行(学校HP掲載)

▼令和五(二〇二三)年度蔵書冊数

図書館蔵書冊数 五三、二七〇冊

▼図書委員会 役員

図書委員長……高三G 村本武範

// 副委員長……高二H 椎名紀仁

// 副委員長……高一H 吉野由剛

展示班

班長……高三A 寺尾浩亮

副班長……高二G 梅田翔成

蔵書点検班

班長……高三G 横山慶大

副班長……高二G 金城智咲

図書館だより班

班長……高三G 加瀬文乃

副班長……高一B 大谷涼



**Narita High School
& Junior High School**

Library